

旅好きで優しかった王鐵城先生

エッセイスト 近藤節夫

一、悲しい知らせにショック

昨年暮れも押し迫った一二月二〇日突然の訃報に接し驚いた。懇意にしていたいたたいた外科医師の王鐵城先生が亡くなられたのである。お元気だとばかり思っていたのに、あまりにも唐突で、悲しい知らせに瞬時愕然とした。

旅行好きだった王鐵城先生は、言わずと知れた世界のホームラン王、福岡ソフトバンク・ホークス前監督・王貞治氏の実兄である。鐵城先生は、貞治氏にとって姉妹の多い家族の中でただひとりの男兄弟であり、同じ野球をプレイした先輩として、また精神的に頼りになる実の兄として、幼少のころより貞治氏が心の底から敬い、慕っていた大切な肉親だった。先生は慶應義塾大学医学部学生時代には、医学部内野球部の選手として活躍された。一〇歳年下の弟に比べれば身体も比較的小柄で、野球選手としては広く喧伝されるような特別な栄誉は授かっていないが、名選手だったらしく万事に控えめな先生が珍しく「昔は私の方が野球は上手くて弟が子どものころはよく教えたものです」としばしば自慢話をされたものである。

三年前ペナントレースの最中に、体調不良を訴えていた王貞治監督に胃がんが発見され、シーズン中にも関わらず、敢えて入院して手術されたのも激務の弟の健康を心配した、外科医である兄の強い勧めがあったからである。

二、箱根温泉湯治が結ぶ先生との縁

振り返ってみると王先生と王家の皆さんとのお付き合いは、二〇年以上も前に遡る。その当時先生「一家とご親戚の皆さんは三〇人近い大所帯で、新年を迎えると毎年小田急ロマンスカーで東京・新宿から箱根湯本温泉へ湯治に行かれ、温泉に浸かりながら一年間の疲れを洗い流し、普段それぞれに多忙で疎遠になりがちな王家の結束と交流を深めておられた。そして温泉でゆっくり身体を休めては、家族間の絆をさらに強めていたのである。王家の皆さんは、この箱根の滞在が随分気に入られたようで、正月三日の朝には近くの国道一号线まで散歩され、揃って道路傍らを走り過ぎる「関東大学対抗東京・箱根間往復駅伝」の選手一人ひとりに声をかけて応援していた。時折その姿がテレビ画面で紹介されることもあった。

「ご家族の皆さんは王鐵城先生を中心に、兄弟仲は睦まじく揃って明るく人格的にも素晴らしい方々ばかりで、中でもいつも笑顔を絶やさない王先生は外科医師として多忙の身も省みず、王家の棟梁として大所帯の中で求心力を発揮され、誰に対しても細かい点にまで心を配っておられた。

私とその王鐵城先生とご縁ができたきっかけは、先生が神奈川県大和市民病院外科部長

時代に「厚誼をいただいていた、当時の上司から細かい留意事項を聞かされたうえで、多くの個人顧客を抱えていた私が、大切な個人客の対応に長い経験があるということと、王先生の大学の後輩だ」という背景もあって、敢えてお世話をしよう話があったことからある。

私が王先生から「厚誼をいただいているから、王先生のお人柄に深く感銘を受け、信頼することができたのは、万事に謙虚で、接する患者に対してはもちろん、一度お会いした人に対してもひけらかすような態度は微塵も見せず、誰にも気を遣われるほど心配りの行き届いた大きな心の持ち主だったことに心を打たれたからである。その高邁な「人格が、多くの患者から広く信頼され慕われていた。人格的に素晴らしいことは、クリニックを開業して多くの患者を抱えながら、永年に亘って東京・新宿区医師会理事の要職を務められ、医学面で大きく貢献されたことでも推し量ることができよう。

そのひとつの典型は、葬儀の場でも窺いがい知ることができた。医学会、政財界、マスコミ、スポーツ、プロ野球、芸能界ら名だたる各界の名士が参列され、マス・メディアのカメラ包围網の中で、弔辞を述べられたのは比較的地味で学究的な医学会関係者ばかりだった。派手な場面に駆りだされる局面もあったことと想像されるが、先生は日ごろから決してそのような派手な場には進んで出られるような方ではなかった。

箱根温泉の年末年始はこの旅館も満室状態であるが、王先生からはいつも早めに予定をお知らせいただき、その点では宿泊や交通機関の手配に頭を悩ませることはなかった。年末近くになると何度か新宿御苑近くに開業するクリニックを訪れては、打ち合わせをした。繁華街のビル3階にあるクリニックでは、看護師でもある奥様が受付を担当されていて、その仲睦まじいおしどり夫婦ぶりは傍から見ても爽やかだった。訪れると「ご夫妻はいつもニコして何「ごことにも如才なく気さくに話してくださいました。

王先生ばかりでなく、「ご家族やご親戚の方々との思い出も尽きない。その中からいくつか印象に残っているエピソードを紹介してみたい。

三、印象深い旅の思い出

ある年父親の故王仕福氏の十回忌が都内八王子の東京霊園で執り行われることになり、クリニック前から霊園まで大型バスの手配を依頼された。事前に五〇人の「ご親戚の方々が乗車されると伺っていたが、当日になってみて驚いたのは、その通りちょうど五〇人の方が集合されたことだった。その中には中国人の方が多かったが、約束を守ることを常に気にかけていられた、王先生と「ご親戚の方々との結束力と信頼感には脱帽したものだ。

さらに「こんなこともあった。「ご親戚ともども打ち揃ってハワイへ旅行された時のことである。「この時貞治氏は、ちょうど同じ時期にハワイで開かれたプロ野球名球会のセレモニーと重なって参加できなかったが、元氣だった貞治氏夫人恭子さんも参加された。かつて貞治氏夫妻が拙宅の近くに住まわれたことがあったので、つい気軽に世間話をしているうちに恭子夫人と私の妻が同窓であることや、恭子夫人の母上が妻の母と女学校の同窓生であることも分かり、その奇遇に話が弾んだ。

そのハワイからの帰国予定日は、占いによると自宅の玄関へ足を踏み入れるのは好ましくない日時であると直前になってお母様の登美さんが仰った。出発日も近づき、すでに旅程はほぼ固めてしまっていた。その時先生は無理に旅行日程を変更することをされず、お母様には成田空港周辺のホテルにもう一日宿泊していただき、帰宅日を一日ずらして翌日おひとりで自宅へ帰られる手配をされたのである。翌日奥様からお母様が無事に帰って来られたとご連絡をいただき、安堵した思い出がある。

海外への旅行も度々お世話する機会があった。

最初に娘さんのヨーロッパ旅行、次いで小児科医師であるご子息の新婚旅行、そして先生ご夫妻のアメリカ旅行である。

このアメリカ旅行では、弟の貞治氏の記念バットが飾られているニューヨーク市郊外クーパーズタウンにある「野球の殿堂」(正式名：アメリカ野球殿堂博物館＝National Baseball Hall of Fame and Museum)を訪れることを楽しみにご夫妻揃ってお出かけになった。

ところが、その当日交通事情によりタッチの差で閉館時間前に殿堂へ到着できなかった。無念の思いで一旦は諦め引き返そうかと思っていた時、氣を利かせたガイドがダメもとで館員に交渉した。「野球の殿堂」入りしている王貞治選手の実兄夫妻が弟の記念品を見るために、わざわざこの博物館を訪ねてきた。時間的に諦めざるを得ないことは承知しているが、ほんのちよつとで良いから何とか王選手の記念品だけでも見せてくれないかとお願ひした。それを聞いた館長はむしろ感激して、特別の計らいにより、遠来の王鐵城先生ご夫妻を館内へ招き入れてくれ、しかも館長自身の案内で館内を隈なく見学することができ、先生はゆかりのある王選手のバットに再会し、そのバットにも触れることができたのである。

帰国翌日に電話で旅行の様子をお尋ねしたところ、先生はアメリカ人、なかんずく「野球の殿堂」館長の親切な配慮にいたく感激し、心を揺さぶられたと仰っていた。

四、夫婦同士でともに旅した思い出

多くの楽しい思い出をいただいた王鐵城先生ご夫妻と私たち夫婦が、ともにヨーロッパへ旅行したこともある。あれは、一九九五年のゴールデンウィークだった。今思い出しても懐かしく印象に残る旅だった。

王先生ご夫妻が成田からパリへ、私たちはロンドンへと同じ日の同じ時間帯にそれぞれ異なる目的地へ向けて飛び立った。先生はパリで留学中の娘さんと会い、私たちはロンドン・ウオータールー駅から「ユーロスター」に乗ってドーヴァー海峡を渡りパリへやって来た。王先生ご夫妻とは、パリ・オペラ座にほど近いホテル・スクリーブに同宿した。ところが、滞在中のある日ディナーをともにしようと思っかけたレストランで、思いがけないハッピーニングが起きてしまったのである。

パリへ立ち寄る度にご利用してすっかり顔馴染みになっていた、イタリア広場に近い高級フランス料理レストランのひとつ「マルティ」で、楽しい四方山話をしながら食事をいただいていた時のことである。ディナーも終りに近づき、デザートをいただくころとしていたころ、顔なじみのギャルソンが慌てふためき、真っ青な顔をして私たちのテーブルへ歩み寄って来たのであ

る。

「ムッシュー！ お連れの女性が階段で転倒され、口の周りからひどく出血されている」

と、それは腰を抜かさんばかりの衝撃だった。トイレに行ったまま中々戻って来ない奥様をちよつと気にされていた先生は、静かに「ちよつと診てきますが、心配はいりません」とギャルソンに導かれて奥様が倒れた現場へ行かれた。まもなく戻ってきたギャルソンがしきりに奥様の傷の状態を気にしているのです。

「心配しなくても大丈夫だ。あの紳士は日本でも有名な名外科医だ」

と笑いながら話してやると彼もほつとしたようにニコツと笑い返してくれた。

暫くして口に血の滲んだタオルをあてがった奥様が先生にエスコートされながらテーブルへ戻って来られた。先生は、

「階段を上る時に転んで顔を階段にぶつけてしまったようです。せつかくお食事にお誘いいただきながら、戻ってご心配をおかけする結果となり申し訳ありません。家内の傷は大したことはありません」

と心配する私に気を遣われるように平静を装っておられた。前歯を折って口元から血が滲んでいる奥様の表情は気のせいか痛々しく、どことなく元気がないように見えた。

すると先生は、

「食事も終ったようですので、もう暫く家内をこのままここで休ませたいと思います。帰り道は分かりますから、私たちはタクシーで帰れます。どうぞ近藤さんはお先にホテルへお帰りになってください」

と心配する私たちに何度も頭を下げながら、一足先に帰るよう懇願された。私たちは奥様の身体が気になり心を残しながらも、レストランを後にした。

翌朝食の場で奥様の明るく元気そうな笑顔に接して、とにかくほつとした。先生ご夫妻は翌日留学中の娘さんと南仏ニースへ向かわれた。私たちはそのまま日本へ帰ってきた。

先生ご夫妻は私たちより数日遅れて帰国されたが、その翌日クリニックへ挨拶に伺った時、先生は私にこう言われたのである。

「この度の旅行では、折角楽しいディナーをご馳走になったのに台無しにして、戻って大変なご迷惑とご心配をおかけしました。できれば、お詫びとお礼のしるしに近いうちに奥様ともども粗宴にお招きしたい」

と仰ったのである。突然思いがけないお申し出をされて、面食らってしまった。お気持ちだけをいただいて、食事のご招待は固くお断りしたが、繰り返しお受けいただきたいとの強いお誘いに、最後は有難くお招きをお受けすることにした。

そして、数日後妻と私は王先生ご夫妻のご招待で、新宿御苑近くの割烹料理店でお食事をいただくことになった。その典雅な和食に妻も私もすっかり酔いしれ、改めて旅行中の思い出話に花を咲かせながら夢見心地のひとつときを過ぎすことができた。

王鐵城先生は、大変義理堅い方である。私たちがそれほどお世話をしたつもりでなくても、先生はいつでも心の底から感謝と思いやりの気持ちで誠実に受け止めてくれる。普通ではとても真似のできることはない。懐が大きく、人を大きな気持ちで包み込んでくれる方である。

五、誠実なお人柄を映し出す対応

こんなこともあった。二〇〇一年二月、東京・新宿のホテルでお母様の「百賀」のお祝い会が開かれた。母上の登美さんは丁度その百年前の九月一日に富山県でお生れになった。生憎その年の九月は体調を崩され、お祝いは一二月に延期されたのだった。先生からはかなり早めにお祝い会場の予約手配のご依頼をいただき、準備に万遺漏ないよう努めていた。プロ野球もオフ・シーズンに入ったせいで王監督も早くから会場に來られて、そこで初めてゆっくり監督と話をすることができた。その席で先生は弟である監督に、

「こちらがいつも旅行でお世話になっている近藤さんですよ」

と私を丁寧に王監督に紹介され、監督からもお礼を言っていたとき恐縮した。ちょうどその年のプロ野球ドラフト会議が終ったばかりで、私もついミハー気分になって「監督！寺原（ドラフト一位指名、現・横浜ベイスターズ投手）が獲得できて良かったですね」と気軽に話したところ、監督は「お陰様でうまくいきました」と受けてくれた。

「百賀」のお祝い会が滞りなくお開きになったことは言うまでもない。それは万端に亘り多くの人びとに温かい気持ちで接し、ご親戚の方々やご来賓の方々のお席を周ってご挨拶をされ、心配りにご欠かない先生の誠実なお気持があったればこそだと思ふ。いつも真摯にご家族やご親戚の方々との心のキズナを大切に考えておられる王先生のお気持ちが報われたひとときでもある。その「母堂の登美さんは今年九月一〇八歳の誕生日を迎えられ、現在もご健在である。

しかし、「百賀」のお祝いの後、お気の毒なことに王家に立て続けに不孝が襲った。

まず、王貞治監督夫人の恭子さんが亡くなられたのである。今年八月、黒柳徹子の長寿TV番組「徹子の部屋」に出演された貞治氏は、忙しい仕事に追われて夫人の体調の悪化に気がつかなかったうえに、女性はとかく痛みを我慢する傾向があり、その当時はそこまで癌が夫人の身体を蝕んでいたということまでは気がつかなかったと話された。今でもそのことが後悔されると重い口で話されていた。

次いで、恭子夫人が他界された不幸に追い討ちをかけるように、納骨された夫人の骨箱が何者かによって墓地から持ち去られたのである。「まだ、どうなったのか分かりません。どうしてこういうことをするんでしょうか」とその後先生にお会いした時、寂しそうに話されたが、いつも多忙な弟の家族の気持ちを慮って随分心を砕いている様子だった。

六、天国へ武者修行に旅立った王先生

今年二月、私は拙著「停年オヤジの海外武者修行」（早稲田出版刊）出版記念会を、母上の「百賀」のお祝い会と同じ会場、東京・新宿の「ホテルハイアット・リージェンシー東京」で開いて、多くの方々に出席していただいた。実は、その案内状を昨年十一月に先生ご夫妻に宛ててお送りしたが、いつまでもご返事をいただけなかった。あの律儀で礼儀正しい先生から何の連絡もないのは変だなあとやや気になっていた。五年前の前著出版記念会にはご夫妻

お揃いでご出席いただき、お祝いの言葉をかけていただいたことが脳裏に残っていたからである。考えてみれば、その時先生はすでに幽明境を異にしていたのである。そして、その翌月先生は愛する奥様が見守る中で逝かれた。

東京・新宿の太宗寺で盛大に執り行われた葬儀で、うな垂れている喪主の奥様にそっとお悔やみの気持ちをお伝えした。

「先生には生前大変お世話になりました。お具合が悪いことを存じ上げず、お見舞いにも参上しませんでした失礼致しました」

奥様からは、

「クリニックは閉めて、春から入院していました。出版記念会のご案内をいただきながら「返事を差し上げず、申し訳ございませんでした」

と丁寧なご返事をいただいた。傍に立ち並んでいた長男の康雅氏と貞治氏からも「長い間本当にお世話になりました」と仰っていた。

出棺に先立ち、喪主である母と遺影を抱いた叔父・王貞治氏の間立ち、遺族を代表して挨拶された康雅氏は、

「お寒い中を亡き父のためにご会葬くださりまして洵に有難うございます。父は厳しい人でした。いろいろな教えてくれた優しい父でもありました。今日ご参列の皆さまに父がこの場で「挨拶するとしたら、お礼とともに毎日ごうかご健康にはくれぐれも気をつけてください」と申し上げると思います」と医師らしい言葉をしっかりと口調で話された。

葬儀から二ヵ月後、拙著『停年オヤジの海外武者修行』の出版記念会を開き、「ご出席いただけなかった奥様にその拙著をお送りした。しばらくして奥様から旅行の思い出を散りばめた温かいお礼のお便りをいただいた。

『停年オヤジの海外武者修行』を「恵送頂きまして有難うございます。御礼申し上げます。益々の御活躍をお祈り致します。お寒い中を葬儀の際は御参列頂きまして有難うございました。おかげさまでパリにもポルトガルにも行かせて頂きました。主人は一人で天国へ武者修行に行ってしまったので、寂しい毎日でございます。時節柄「自愛下さいませ」と認められてあった。

あの「こやかな王鐵城先生が天国へ武者修行に旅立ってしまい、もう永久にお会いできないと思うと辛し、私にとってもとても寂しい。思い返してみると王先生と奥様を始めとして、王家の皆さんには計り知れないほど心に残る思い出をいただいた。それもこれも類稀なる素晴らしい「ご人格の王鐵城先生と、先生にいつも寄り添っておられる奥様の温かく優しいお人柄のおかげだと信じている。

まだまだ思いつきりお話もしてみたかった。「一緒にもつと旅行もしてみたかった。ともに美味しい食事とお酒も味わってみたかった。思えばお客さまと業者の間柄を超えて、長い間に亘って「厚誼いただいてこれほど心を洗われる、人間的に立派な方はほかに思い至らない。

王鐵城先生！ 楽しい思い出をたくさんいただき本当にありがとうございます。先生の「冥福を心よりお祈り致します。どうぞ安らかにお眠りください。